

辰巳会より

丹波篠山秋季例会

会務報告 小倉五郎

六十年十月二十二日

丹波篠山観光バス車中に
皆さんよくいらっしやいました。
今年の夏場は殊のほか暑さが酷
しかったのと又長かった為、日頃
は健康を自負しております私も、
一時は聊かグロッキー気味で、そ
の日に片付けなければならぬ仕事
も繰り延べ、自重と己が
心に云いきかした事でしたが、皆
さんには本当にお元気で今日の会
合に御参加頂きまして恂に有り難
う存じます。

案内状を発送致しました当時は、
暑さが尚厳しかったせいか、当初
出席の御返事が少く三十名位の出
席だろうかと案じておったのであ
りますが、その内三十名に達しま
すとせめて四十名は御出席頂き
いなあと念じておりました処、締
切日に近づくに従いました段々と
増え、お手許の出席表の如く総員
五十名と云う盛況になりました恂

に有り難き極みと存じます。
さて、そこで唯今からの行動予
定であります、万事は先程差上
げました案内状の通りであります
が、今一度大略を申し上げます、
これからの行動に資して頂きたい
と存じます。

これから途中一回十分位のトイ
レ休憩を取りますがバスは一路篠
山城下に向います。到着予定は十
一時でありまして、そこには篠山
町役場の御好意によりまして、ポ
ランティアの方が二名お迎えして
下さいます。この方々は考古学に
造詣の深い方や退職後の学校の先
生方で全て無報酬で町の観光宣伝
の為、奉仕しておられるのであり
まして、この方々の御案内によっ
て先ず能楽資料館や丹波古陶館等
を見学の後、今日の昼食会場の湯
陽楼に一先ず落ち着いて頂きます。
入浴も可能ですし又お疲れの方
は三時頃までそのまゝ休憩されて
も結構です。そして食後再びボラ
ンティアの方々によって三時頃ま
で皆さん方の体力に応じたコース
を徒歩で御案内頂くことになって
おりますので左様御諒承頂きたい
と存じます。
処で今日昼の御馳走ですが、丹

中部支部だより

竹下 富士松

(六十一一) 泊二日ノ懇親会
伊勢神宮

そこは中部支部のおひざ元
何はともあれお参りせずば
申しわけなし神妙に

玉砂利ふんで老杉の
参道あゆむ昼さがり
清い流れの五十鈴川
心身きよめ襟たらし
辰巳会の健在を

いつく迄もと願ひし
サテ本番のスケジュール
鳥羽の港の街はずれ
安楽島の珠海荘
見晴らしはよし 気分よし
顔を揃えた七名は

田中・岡本・竹下・小原
藤田・小倉に松下氏
気心知れた兄、弟

ひと風呂すまして夜の宴
年はとつてもひけとらぬ
色気はなけれど食い気あり
差す盃に友情の
うつりて熱きやりとりに
思はは遠く旧主家の
鈴木時代のあれやこれ

波篠山と云いますと誰しも直ぐに
牡丹鍋を連想されるのであります
が残念乍ら今回は時期的に早いと
申しますか、矢張り之は北風吹き
荒む十二月以降でなければ駄目だ
そうです。

従ってそれは次の機会に譲る事
にしまして今回は土地柄山菜料理
にむぎとろ御膳、それに文字通り
取れぐの丹波松茸の土瓶蒸しを
用意致しておりますので、ごゆっく
り御賞味して頂きたいと存じます。
尚、お持ち帰りになりますお土
産と致しましては時節柄松茸、栗、
山の芋等が出盛りであります別
けて御承知のお正月のお節料理に
欠かす事の出来ない黒豆、所謂天
下に名高い丹波黒があります。然
し之も残念乍ら新には時期が若干
早く現在の処ひねしかありません
が、ひねでも別にどうと云う事は
ありません。私の方などは毎度新
よりひねを多く用いております。
お値段は昨日照合致しました処、
三〇〇瓦で八〇〇円、六〇〇瓦で
一、五〇〇円、一、二〇〇瓦で二、
九〇〇円との事でした何れも紙箱
に這入っております。若し御入用
の方が大勢おられます様でしたら
後程伺つて宿の方へ屈けて貰つて

語る言葉に花が咲く
昔に還るお前 俺

まだ衰えぬ心意気
飲みほすビールに泡がちる

ほろよい機嫌で寝転べば
窓より洩る、月の影

そうだ昨夜は十五夜で
今宵は十六夜朧月

隣りの島は何島ぞ
漁火ゆれてチラホラと

波も静かに夜はふける
一夜あくれば行楽日和

あ、天高く気は澄めり
車とばして志摩ロード

海岸ぞいに五十キロ
肌さわやかに風薫る

展望台にて一望すれば
遙かに遠く太平洋

見えたぞハワイがハワイが見えた
百も承知の冗談なれど

十円はりこみへつぷり腰で
望遠鏡をのぞいてみれば

水平線にたなびく煙
遠洋通いの油槽船

呵々大笑も興のうち
賢島から島めぐり

遊覧船に乗りこめば
船上昼食 バーベキュー

ミス賢島 浜乙女
サービスはよしキリョウよし

も良いと思えます。
尚甘党の方に内緒で一寸申し上
げます。この丹波黒の甘納豆を是非
一度試食してみられては如何かと
存じます。

今迄私も寡分にして存ぜなかつ
たのですが、先程下検分に参りま
して初めて知ったのであります、
二、三粒口中に入れた時のまろや
かな、アノ丹波黒そのもの、味は
とても言葉では云い表わせません。
今日も忘れず買って帰る心算です。
宿の直ぐ近くですから同好の志は
御案内致します。
次に「たつみ」誌四十三号につい
てであります、色々な事情が絡
み合いました大変遅くなりまして
申し訳なく深くお詫び申し上げます。
然し既に発送は完了致しており
ますので、先着御査収戴いた事と
存じますが出来栄は如何なもので
しょうか。
尚引き続き四十四号編纂に取り
かかっておりますが、今少し原稿
を頂きとう存じますので何分とも
宜敷くお願い致します。
処で次は余り良いニュースでな
いのであります、日頃健康その
もの、様でありました大幡、畑、
両幹事が現在長期に亘り入院療養

焼蛤に舌鼓

アゴ湾内の景色さえ
ウツカリ見のがす磯の味

浮き世離れて船はゆく
静かな波間こ、かしこ

養殖真珠の筏が浮ぶ
船のゆくてに二羽三羽

友よぶ声か浜千鳥
伊勢名物の赤福餅と

イミテーションの真珠の指環
女房の土産もと、のつた

まだ暮れやらぬ志摩の海
又逢う日迄サヨナラ

別れ惜しんで西・東
あ、寒からず暑からず

この晴天に恵まれて
楽しき会を終了す

原稿募集

内容 随想 短歌 俳句 詩
写真 鈴木往時の思い出
などを

必ず原稿用紙に縦書で

締切 四百字詰五枚程度

送先 昭和六十一年五月末日
神戸市中央区京町七二

太陽鉱工(株)内
『たつみ』編集部宛

サントリー山梨ワイナリー見学と山梨県立美術館にて絵の観賞

秋季旅行は標記のプランにより左記の如く例会を行った。

十一月七日、前夜からの烈しい雨でどうなるかと心配だったが、幸い朝方から上り、明るい陽差しが出て来たのでホッとしました。

一人欠席、後は全員三十一名揃ったので九時十分新宿を出発した。

コースは中央高速に乗り、甲州バイパスを経て山梨ワイナリーへ約二時間の行程である。

車中、例によって斉藤幹事の挨拶があった。
本部の大幡久一さんが十一月四日、九三才の高齢で亡くなられたとの事で御冥福を祈り黙禱を捧げた。

次いで石田幹事の旅行についての説明がある。

東京を離れて約一時間、談合坂サービスエリアで少憩。談合坂とは面白い地名だが、バスガイドの説明によれば、昔武田信玄と北條某がこゝで談合したのでこの名が



甲府市山梨美術館庭園 辰巳会秋季例会 60-11-7

残っているという。山梨の山中に入っていくにつれて両側の森や林の紅葉の色づきが一段と鮮かになり美しい眺めである。
十一時半、定刻通り山梨ワイナ

リーに到着、少憩後工場見学する。見学に入る前にワイン映画や山梨ワイナリーの歴史をパネルで見ても知識を広めておく。醸造瓶詰棟ではぶどうからワインが誕生する工

辰巳会東京支部秋季旅行会参加者	西川 政一	池田 文雄
同 夫人	拓山 寿郎	
斉藤 席吉	建部 清也	
坂本 寿	同 夫人	
上野 金治	荒木 從繩	
同 夫人	同 夫人	
石田 俊一	嶋内 桃枝	
田代 義雄	芦原 有一	
同 夫人	田辺 満寿子	
立花 実	同 同伴者	
同 敦子	杠 繁	
小島 実	安東 浄	
同 夫人	中島 英吉	
同行一人	同 同伴者	
煙石 隼人	小室 明子	
国広 五郎	計 31名	

程を見学した。次に樽や瓶詰の貯蔵庫を見る。こゝは常時温度を十五℃に保って品質管理をし、五年から七年寝かせておくそうだ。
こゝからバスで更に敷地の奥の方にあるワイン博物館へ行く。

創業は明治三十二年、馬井商店として創立後寿屋とした社名をサントリーにかえたのは、ビール事業に進出した昭和三十八年。サントリーのワインの歴史は古

い。余りにも有名な赤玉ポトワインのヌードポスター(大正十年)の原画を上げしげと眺める。

見学を一通り終って、野外レストラン「ワインパラソル」でバーベキューの昼食である。

ぼつぼつ空腹を覚えてきた頃なので皆おいしそうに食べている。

七、八合はあると思われるジャージャーに入った赤白のワインがサービスで各テーブルに置かれている。デザートのお惣菜も美味であった。

食後、売店で三三五五買物をし、新酒ワインを白、赤各一本をお土産に貰い、午後二時厚くお礼を申し述べて山梨県立美術館に向う。

山梨県立美術館は置県一〇〇年の記念事業として昭和五三年秋に開館された。三万八千平方メートルの豊かな緑は美術館の館にふさわしい落ち着いた雰囲気を出している。県外からも沢山の人がみえるそうである。

こゝはミレー・コレクションでも有名だ。出世作『種をまく人』、中期の代表作『夕暮れに羊を連れ帰る羊飼』の前に立った時は胸のときめきを覚えた。それは名画に接した時の感動でもあつたらう

か。
こゝで全員で記念撮影。途中勝沼のICを下りた処にある信玄本陣で土産物を買って六時少し前無事新宿に帰着、解散した。

お天気もどうやらもち、お土産も沢山買いたい旅行だった。皆様どうもごきょう様でした。(中島記)

本号の発刊が、大変遅れまして申訳御座居ません。
最近、柳田さんの御体調やや低下気味で、私が代理編集のお手伝いを致しました。
次号から遅れを取戻したく存じますので、原稿の方よろしく御協力賜度存じます。(松下重男)

へあとがき

俳句

虎の雨

柳田 義一

朱色の肌 磨かれている 木守柿
僧形の 女ひとりが 虎の雨
藤絡む 紫の雲 宙ずりす
ふるえる鬼 晦日のそばの 唐辛子
雪の夜の 道の曲れる 檜山考
福豆の 噛む音確か 年男

黎明の女たち
島京子編
黎明期を生きた8人の女性たち
明治・大正・昭和初期

本書は、島京子氏が、明治・大正・昭和初期の黎明期を生きた8人の女性たちについて、その生涯、業績、そしてその時代の光と影を、丁寧に描き出している。女性作家たちが描いた、女性たちの物語。

鈴木よね刀自
「黎明の女たち」で島京子が紹介
神戸新聞出版センター発売/定価千三百円。「ひょうご女人列伝」は八名の女性を取り上げているが、鈴木商店女主人・鈴木よね刀自は、幻の商社に実在したもので、として紹介されている。

たつみ 第44号
昭和61年1月1日発行
編集人 柳田 義一
辰巳会本部
神戸市中央区京町72
太陽鋳工株式会社内
電話331・0920
印刷所 中外印刷株式会社